会報 ウッディ阿賀

第3号　1999年　11月

⇒「込田棟梁」の指示で一本一本丸太が組み上がる

ログハウス 木組み作業は急ピッチ

秋たけなわ。『ウッディ阿賀の会』の基地（三川村戸谷渡長谷）づくりは、快調とまでは言えないものの、一歩一歩の積み重ねで確実に進んでいる。込田世話人代表は「今のペースだと、降雪の時期にもよるが、年内に五分通り、来年の夏か秋口には完成するだろう」とみている。

現在、月2回の作業日には毎回24、5人が駆けつけ、立ち木の伐採・運搬・ログハウスの木組み－などに汗を流している。どの顔も目は生き生きと輝いており、仕事では味わえない充実感に浸っている。

一面、メンバー固定化のきらいがあり、事務局は「秋の森は豊かで、とても素敵です。毎回とは言いません、森林浴するつもりで作業の進捗状況を見にきてください」と呼び掛けている。

都市と山村の交流を評価

中部・北陸グループコンクール

込田代表　『ウッディ阿賀』売り込みに熱弁

平成11年度の『中部・北陸ブロック林業グループコンクール』は、同年8月26、27の両日、石川県津幡町の『倶利伽羅塾』で開かれ、関係8県の代表が集まった。本県からは、わが『ウッディ阿賀の会』が選ばれ、込田幸吉代表と伊藤武文幹事が参加した。

⇐ 熱弁を振るう込田代表

各地の林業研究グループは、林業経営者や山林所有者の集まりが普通で、それぞれ地域の林業発展を目指して研究を続けている。『ウッディ阿賀の会』のように会員のはとんどが林業経験のない素人のグループは珍しく、今回は富山県代表と合わせて2組だけだった。

持ち時間15分の報告に立った込田代表は、会の設立趣旨や日常の活動について素朴に、かつ熱情を込めて訴えた。いわゆる専門家色のない発表は好感をもって迎えられ、各報告終了後の質疑応答では審査員の質問が集中し、総評の中でも、「都市と山村交流の実験」として名指しで活動が高く評価された。

ただ実際の成績評価では、「方向性は良いにしても、なにぶん活動実績が浅いので今後に期待したい」の言葉を頂戴するにとどまった。しかし懇親会では、活動の新鮮さに関心が集まり、なかには「一度山を見に行きますよ」と声を掛けるグループもあったはど。

来年2月、東京で開健される全国大会代表には、長野県の『駒ケ根市林業青年会議と愛知県の『旭町林業研究会』の2グループが選ばれた。

◇　◇

ハチにご用心　香田和夫さんが作業中ハチに刺されて医者がかりしました。手当が遅れると命に関わる、と言われたそうです。ハチ刺されには免疫はなく、2度めは大変危険と言います。

次の週には、完全武装して、香田さんが気付かずに触ったスズメバチの巣を取り除きました（巣の中のハチノコを食べた豪の者もいたよう）。これから寒さに向かいますのでハチも騒がないと思いますが、お互い注意しましょう。

カメラ・ウォッチング I

⇑ 伐採した木を集める"ひっぱりだこ"の作業は細心の注意が必要だ

⇑ 掛矢を振るって丸太を所定の位置に押し込むのは簡単そうで面倒である

ヤング女性の後藤亜希子さんは頑張り屋。加入いらい皆勤で、木に上って枝を落とし（上右）、下れば下草刈り（上左）と大活躍

カメラ・ウォッチング Ⅱ

⇑ ワァー煙い、鍋奉行も大変

⇑ 丸太の運搬はもっぱら"人海戦術"でつかれます

そろそろキノコ汁も煮えてきた。なによりの楽しみであり、活力の源である ⇒

役員・事務局からのお願い

［安全について］ 林業グループコンクールに参加した際、発表資料として作業写真を使いたいと考えたのですが、どの写真も安全上に問題があって1枚も使えませんでした。こう言えば、賢明な皆さんは察しがつくでしょう。

最近、作業の慣れからくるヘルメットの不着用など心の緩みが目につきます。チェーンソーの操作、伐採時の避難などでもひやりとさせられる場合がありました。作業の安全には二重、三重に念を入れましょう。 **（伊藤　武文）**